

薬害教育の実践例について

※本資料で紹介する授業実施計画、ワークシート、被害者の方に講演でお話しいただいた

内容は、必ずしも厚生労働省の見解を示すものではありません。

※先生方をはじめ、御協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

◆実施校：池田町立池田中学校

【対象学年】中学3年生 ※講演のみ全校生徒を対象

【教科等】社会科（公民的分野）「消費生活と経済」

【学習の目的】

薬害を起こさない社会のあり方や、自ら医薬品を消費する者として何をすればよいかを考える。

【授業の流れ】

全校集会：「薬害による被害の実態を知ろう」

○増山ゆかり氏（（公財）いしずえ サリドマイド福祉センター）による講演を実施（全校生徒を対象とした人権集会におけるプログラムの一つとして実施）概要は以下のとおり。

（薬害について）

○単なる副作用と違って、例えば、回収がちゃんとできていれば、健康に多大な影響があることがいち早く公開されていれば等、十分な対応をとらなかったことが被害の原因。

（自身の経験について）

- 幼少期は、故郷・家族と離れ、東京病院に入院しての治療生活を送った。
- 外で石を投げつけられたり、飲食店の入店を断られたり自分はそんな風に人に言ったりしないと決めた。
- 就職し、米国留学で障害や病気を持つ人たちの自立について学んだ経験などを経て、これまで自分が生きにくさを感じていたことに気が付く。

- 母親の死の際には、これまで自分がどう生きるかをずっと考え続けてきたが、家族にこれほど思われていたことに気が付く。

(生徒たちへのメッセージ)

- 自分がやってみたいことを実現することが人生にとって大事。



1 時間目：「なぜ薬害は起き、被害が拡大したのだろう」

- 全校集会の内容を復習し、サリドマイドによる胎児の障害について説明。
- 「なぜ、薬害は起き、被害が拡大したのだろうか」を課題として、薬の販売から、被害発生、回収措置に至るまでを記した年表や、被害者数の推移を示した資料等をもとに、行政の対応や制度の問題点を考える。

(生徒の回答例)

- ・承認審査の段階で、子どもへの影響などいろんな可能性を検討するべきだった。
- ・外国の研究者による警告について一般の消費者に伝わっていたら被害拡大を防げたのではないかな。
- ・「無害」という宣伝文句に根拠がなく誇大だったのではないかな。
- ・販売停止後、製品の回収を徹底するべきだったのではないかな。

2 時間目：「薬害を起こさない仕組みを考えよう」

- 「薬害を起こさないために、どのような仕組みにすると良いだろうか」を課題として、医薬品をめぐる関係図（国、医療機関・薬局、製薬会社、国民）をもとに、グループで議論。

（生徒の回答例）

- ・審査には、専門家など十分なチェックを行える体制を整えることが必要
 - ・審査の内容や結果を一般にも公開すればよいのではないか。
 - ・患者個人の体質や状況を踏まえて処方することが必要。
 - ・副作用が発生したら、患者や病院、製薬企業などから情報を集め、皆で共有することが必要。
- 薬害を起こさないためには、企業や医師等の関係者間で副作用情報等の情報を広く共有することが大切であり、幅広い情報共有を可能にするための、PMDA 等の役割を紹介。



3 時間目：「消費者としての在り方を考えよう」

- 医薬品が消費者に届くまでの経路を知り、「医薬品が消費者に届くまでに、薬害を防ぐ工夫ができないだろうか」を課題として、グループで議論する。

(生徒の回答例)

- ・ 誰にどれだけ処方されたかを記録して、回収の必要が生じた場合、確実に回収できるようにする。
- ・ 副作用の発生頻度や傾向を把握できる仕組みがあったら良いのでは。
- ・ 販売する時に、リスクの高い品目とそうでない品目で販売方法を変える。

○最後に、サリドマイドの当時の宣伝広告を紹介。消費者としてどう行動するとよいか考える。

(生徒の回答例)

- ・ 関係者全体で情報を共有することが大切だと思った。
- ・ 医薬品の消費者として、自分で医薬品に関する情報を集めようとする必要だと思った。
- ・ たとえば薬剤師に飲み方を相談する、副作用の発生を疑ったら相談をする、薬の飲み方や注意事項を確認することも大切だと思った。
- ・ 過去の出来事を知ることが、薬害を防ぐことにつながると思う。



【授業を受けた生徒の感想（一部）】

- ・薬害という言葉を知った。
- ・薬害を防ぐために一番大事なことは「情報」なのではないかと思った。

授業で一番印象に残った内容

- ・薬には必ず副作用があるということ。
- ・薬害が起こる過程では人為的なミスがあったということ。
- ・薬害によって大きな被害が生じてしまったこと。

もっと知りたいと思ったこと

- ・なぜ当時、被害の発生・拡大を防げなかったのか。
- ・当時の医薬品の安全性に対する認識や意識
- ・他の薬害事件について
- ・医薬品の安全対策や医薬品以外の製品の事故防止の取り組み

◆実施校：長崎日本大学中学校

【対象学年】 中学 1 年生

【教科等】 道徳（公正、公平、社会正義）（1 時限）

【ねらい】

○被害者の声を聴くことで、被害に苦しんでいる人に共感するとともに、薬害などの人災を繰り返さないようにするためにはどうしたらよいかを考えることを通して、周囲の状況に流されることなく正義と公正を重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めようとする道徳的判断力を育てる。

【授業の流れ】

○母子ともども C 型肝炎に感染した被害者の映像を視聴し、自分にも起こりうる出来事、として生徒にとらえさせ、自分の身に置き換えたらどのような気持ちになるかを考えさせる（10 分間）。

（生徒の回答例）

- ・ 健康に生きられなくなって悲しい。
- ・ 米国で禁止されたときになぜ日本で禁止できなかったのかと憤る。



○「薬害を学ぼう」のp 5、6にある薬害発生についての説明から、各関係者の果たすべき役割を確認する。その上で、以下の手順で考えさせる。(30 分間)。

- ① 教師が作成した各関係者がそれぞれの役割を果たせていないストーリーを生徒に演じさせる。
- ② なぜ、そのような状況になってしまったのか、その背景を考えさせる。その際、各関係者がそのような状況になるまでにどのような葛藤があったのかを想像させる。
- ③ 考えたことを発表させ、その上で社会正義を実現することの難しさとともに、そのような状況でも正しい判断や行動をするためにはどのようなことが大切なのかについて話し合う。

○本時の学習を振り返り、どのようなことを学んだのかを考えさせ、発表させる。(10 分間)



【授業を受けた生徒の感想（一部）】

授業で一番印象に残った内容

○ロールプレイにより、それぞれの役割を果たすことの重要性に気が付いた感想

- ・どの役にも薬害を防ぐために改善できる場所があると気づいた。他人事と思わず、自分も関係があると思って生活したい。

○自分にも関係のある出来事だと認識した感想

- ・無関係だと思っていたが、親が感染すると、子供にも感染することに驚いた
- ・自分だけではなく、その子供にまで影響があることが印象に残った。
- ・同じぐらいの年齢の子供が薬害の被害者だと聞き、薬害が身近にあることを感じた。